

Over Cancer Together

がんサバイバー・スピーキング・セミナー

あなたの声が社会を動かす

第9回 開催レポート



がんを共にのりこえよう

ワークショップ

開催日 2023年6月10日（土） 10:00-16:30

開催場所 東京ウィメンズプラザ 視聴覚室

参加者 26名

プログラム

時間	分	コンテンツ
10:00-10:10	10	挨拶
10:10-10:30	20	アイスブレイキング
10:30-10:40	10	OCT 卒業生からのメッセージ（2名）
10:40-11:50	70	ワークショップ 事前の宿題をグループ内で共有
11:50-13:00	70	昼休憩
13:00-14:00	60	ワークショップ
14:00-16:00	120	発表（全員） 修了証授与
16:00-16:10	10	休憩
16:10-16:30	20	総評（ゲスト、オブザーバーより）

がんサバイバーやがん患者が自らの体験をプレゼンテーションする際に必要な伝え方やマインドを学ぶ「第9回がんサバイバー・スピーキング・セミナー」が6月10日、東京都渋谷区の東京ウィメンズプラザで開催されました。

このセミナーは、CNJのプロジェクト「Over Cancer Together～がんを共にのりこえよう～あなたの声が社会を動かす」の事業として2012年にスタートしたもので、これまでに223人が修了。その多くが、がん患者支援やがん情報の発信、がん政策の分野などで活躍しています。

今年のセミナーには、全国の応募者から選ばれた26人が参加。事前にごがん治療に取り組む医療者や患者団体の代表、プレゼンテーションスキルコーチなどからのレクチャーをオンライン視聴したうえで、セミナーに臨みました。当日は、各自が準備してきたスピーチ原稿についてグループ内でお互いにループ内で意見交換したり、OCT卒業生であるファシリテーターにアドバイスを受けてたりして、ブラッシュアップ。セミナーの終盤では、参加者全員が、練りに練った原稿を手にその思いや提言をスピーチしました。笑いと感動、新しいつながりにあふれた当日の様子をレポートします

1. スタッフ挨拶

参加者をサポートする講師やファシリテーター、セミナーの運営に携わるスタッフなどから挨拶がありました。



進行：大友明子
(OCT 1期・CNJ乳がん体験者コーディネーター)

2. アイスブレイキング

初対面で緊張する参加者の緊張をほぐしてくれたのは、コービンあやこさんによる「アイスブレイキング」。グループに分かれて3種類のゲームを楽しみました。コービンさんの「間違いを恐れずに」というアドバイスの後、各グループのファシリテーターがリードする形でゲームがスタート。ゲームを楽しみながら、名前や住んでいる都道府県、好きな色といった情報交換をしたり、サイコロを転がして出てきた質問に答えたりと、笑顔と歓声がいっぱいのリラックスタイムとなりました。



3. OCT卒業生によるプレゼンテーション

OCTの卒業生はすでに約240人にのぼり、各方面で活躍しています。その中から今回はロールモデルとして2人の方に登壇していただきました。

OCT 1期・岸田徹さん

25歳と27歳でがんに罹患。自身の闘病経験を活かし、がん患者の声を届ける活動をスタートした。現在、NPO法人がんノート代表理事、国立がん研究センター広報企画室所属、厚生労働省の各種がん検討委員や大学の講師など多岐にわたって活躍中。



OCTに1期生として参加し、発信することや繋がりを持つことの大切さを知り、それを契機にがん患者さんへのインタビューWeb番組「がんノート」の配信を始めました。大事なものは「ゼロから1を生み出すこと」。私はまずは100回続けようと目標を掲げました。継続するのは大変なことでしたが、30回続けたときにメディアに取り上げてもらい、60回で病院から配信させてもらえるようになり、90回ぐらいで、某保険会社からCM出演のオファーがありました。100回を超えた今もさまざまな人に支えられて活動が続けられています。困難にぶつかることもありました。そんな時に支えとなったのは、OCTの仲間の存在でした。仲間はいろいろなところで活躍しています。その仲間の活躍から刺激をもらったり、困った時に相談に乗ってもらったりしてここまで来ました。みなさんもぜひ一緒に頑張っていきましょう。

OCT 6期・大穂その井さん「Adventure with cancer～すべてはOCTから始まった」

再発乳がんサバイバー。治療と両親の介護が重なった『がん老介護』の体験をOCTで発表。さまざまな場で発信を続け、出版社でのWeb連載や、腫瘍内科医とのオンライン勉強会主宰、癌治療学会での発表など、多方面で活躍している。

54歳で乳がんが再発し、同じタイミングで同居している親2人が倒れました。自分の治療と親の介護が重なり追いつめられましたが、ネットでも欲しい情報が見つからず困りました。自分の体験をまとめようと参加したのがOCTです。そこで初めて体験したのが、本音も泣き言も言える仲間といることの安堵感でした。仲間からアドバイスをもらいながら苦心惨憺してスピーチ原稿を書くうちに、治療と介護が重なり悩む人に向けて「一人じゃないよ」と伝えることが自分の使命だと気づきました。



ここで作ったスピーチ原稿を使い、膨らませることで、講演やセミナーで話す機会を得ることができ、出版社のWeb連載の機会もいただきました。腫瘍内科医とのオンライン勉強会や、がんに加え難病も経験している女子とのワークショップ、癌治療学会での発表など、以前は想像できなかった景色を見ることができています。みなさんもOCTで自分の新しい役割が見つかったら、いろいろなことに挑戦してください。振り返るとOCTが終わってから冒険に出ているような感じがします。

4. ワークショップ（午前の部）

ワークショップの開始にあたって、プレゼンテーションスキルコーチの久田邦博さんから、「愛あるフィードバック」の勧めがありました。「たとえ嫌われても、つまらないとか、協力したいけど何をしたいのかよくわかりませんと正直に伝えること、言ってもらった人は作った笑顔でもいいから返すことが大事」とユーモアを交えてアドバイスしてくださいました。グループワークの時間が始まると、早速準備してきた原稿を読み合い、互いにフィードバックしたり、グループでディスカッションしたりしていました。

5. ワークショップ（午後の部）

昼休みの後は、引き続きスピーチ原稿の修正を重ねていきました。講師やファシリテーターにも積極的に相談しながら、少しでも思いが伝わる原稿にしようと努力する姿が印象的でした。最後は、本番に向けもう一度グループ内で発表。さらにグループの仲間からフィードバック受け、発表の準備を進めていました。



6. 全体発表

全体発表前には再び、プレゼンテーションスキルコーチの久田邦博さんがアドバイス。「原稿をなるべく見ず、（相手の）目を見て語りかける」「失敗を恐れずチャレンジする」などと背中を押してくださいました。そしていよいよ本番。この日の参加者26人全員が一人ずつマイクの前に立ち、3分間のスピーチを行いました。

発表のテーマは、ご自身のがん経験を通して、感じた必要な支援やがん検診の重要性を訴えるものから、オストメイトやオストメイトマークへの理解を求めるもの、がん患者が抱えるセクシャリティの問題まで幅広く、どのスピーチからも「自分のがん経験を他のがん患者や社会のために役立てたい」という熱い思いが伝わってきました。なかには、歌や落語を取り入れたものや、会場のリアクションや参加を求めるものなど、個性的なスピーチも。OCTの場を「繋がる場」と考え、ご自身がこれから取り組みたい活動への協力や参加を求める呼びかけが多かったのも印象的でした。



【スピーチの全テーマ】

1. 「がんになってよかったと思える社会を創造するために」 (がん患者の方に)
2. 「オストメイトの周知について」 (すべての方に)
3. 「がんに関する情報を正しく理解して、必要な人に伝える仲間になりませんか」 (会場のみなさんに)
4. 「がんサロン杉並にお力添えを」 (がん患者支援活動をしているみなさんに)
5. 「がんと診断された時から、看護やケアを」 (医療者と一般の方に)
6. 「がん医療ネットワークシニアナビゲーターのことを知ってほしい」 (県行政関係者に)
7. 「医療間の連携と、患者相談の体制づくりを」 (医療者に向けて)
8. 「がんにかかった従業員への関わり方」 (企業の人事担当者や管理衛生担当者に)
9. 「がんサバイバーの男女に特化した出会いのコミュニティーを」 (女性特有のがんに罹患した未婚の女性及び会場のみなさんに)
10. 「すぐできる労働力損失リスクへの備えについて」 (企業人事及び行政担当者に)
11. 「温泉で乳がんの女性の心と体を癒やしたい」 (乳がんの女性に向けて)
12. 「がんを振り回されず自分らしく生きていこう」 (がんを罹患した方に)
13. 「中年世代の患者にとっての場所づくりと相談支援のシステムづくりを」 (働き盛りのがん患者の方とその周辺の方に向けて)
14. 「これまでとは異なるがん患者の生活支援事業創出の必要性について」 (京都府に向けて)
15. 「あなたの声が聴きたい」 (一般の方に)
16. 「すい臓がんのイメージを変えたい」 (この世の中のみなさんに)
17. 「がんの人ほど笑うべき」 (がんになる前の人、がんになったばかりのかたに)
18. 「がんサバイバーの孤独をめぐろう」 (特に血液がんサバイバーの方に)
19. 「逆境に打ち勝つ力～レジリエンスを大切にしましょう」 (中年の危機を感じる世代に)
20. 「10万人に1人の慢性骨髄性白血病に罹患して」 (がん患者のみなさんに)
21. 「『あなたは大切だ』が伝わるがん患者とのコミュニケーションのヒント」 (家族や職場の人、友人ががんになった方に)
22. 「音楽の力でやさしい社会に」 (一般の方に)
23. 「精神疾患のある私のがん治療を受けて思うこと」 (医療関係者の方、精神疾患を抱えているがん患者の方、すべてのがん患者とその家族の方に)
24. 「がんサバイバーの働く方向性について」 (すべての方に)
25. 「子宮頸がん、行っていないければ一生後悔」 (一般の女性の方に)
26. 「幸せに直結する自分の捉え方」 (がん患者の方に)

7. 総評（講師、ファシリテーター、オブザーバーからの感想）

全員の発表を受けて、講師やファシリテーター、オブザーバーからコメントをいただきました。

グループ7・ファシリテーター 一志将人さん（OCT8期）



話しにくいことや機微に触れるようなことも正々堂々と話してくださっていました。ここに至るまでにはいろいろな葛藤があったり、自分に向き合う時間もあたりしたと思います。ここで話してくださった3分とこれまで向き合った時間に経緯を示したいと思います。すでに活動を始めた人、これから始める人、迷っている人といろいろなステージがあると思いますが、私は支援者の方の力も借りながら自分のやりたいことを見つけていきました。みなさんには、今日で終わるのではなく、自分のペースでいいので、ここでの経験や学んだ知識をこれからも伝えていってほしいと思います。

グループ6・ファシリテーター 野北まどかさん（OCT6期）



気になるな、やりたいな、伝えたいということはあるけれども、これまでは恥ずかしくて行動に移せなかった方もいらっしゃると思います。それをこの場で発表できたのはすごく大きなことです。これからも身近な人にも、そうではないところでも伝え続けることはとても大事です。そうすることで、「あっ、その話なら何かしてあげられる」とか「私はできないけど誰々さんは知っているよ」とどこかでつながっていきます。私が活動を始めたのは、OCTに参加してから1年後のことでしたが、いろいろ考えて止まっていた1年間も今思えば貴重でした。みなさんも一瞬一瞬を大事に過ごしてほしいと思います。

グループ5・ファシリテーター 高木健二郎さん（OCT6期）



非常に興味をもって聞くことができました。みなさんの話を聞いていて、多くの方が「ぜひ自分とつながってほしい」と言っていることに気づきました。これは非常に大切なことだと思います。私は2019年に参加しましたが、同じグループだった6人のうち4人が自分で団体を立ち上げ、2人も活動をしていて、今も交流は続いています。きょうこの場でつながりができた仲間はこれからみなさんが歩むうえで力になってくれる方なので、きょうの出会いを大切に、これからも頑張ってくださいと思います。私ともぜひつながっていただけようお願いします。

グループ4・ファシリテーター コービンあやかさん



毎年この場に立たせていただいている、ずっと続けていると記憶が薄れてくる部分もあり、忘れたくないなという思いがあります。そしてきょうもこの場に来て、その思いが内から込みあがってくるような感じがしています。私自身は子宮頸がんのコミュニティを立ち上げたものの紆余曲折があつて、この2年間足を止めている状態です。でもきょう、みなさんの頑張りを見て、また頑張ってみようかと思っています。みなさんも明日活動を始めてもいいし、止まってもいいし、自分のペースで進んでもらいたいのかなと思っています。きょうはありがとうございました。

グループ3・ファシリテーター 岸田徹さん (OCT1期)

スピーチでは「3分間」というルールをほとんどのみなさんが守っていて、マックスでも4分以内で終わっていて優秀だったと思います。今後ブラッシュアップしていけば、決まった時間のなかで自分の思いをより伝えられるようになると思います。僕は「がんノート」を2014年に始めましたが、数か月休んだり、空中分解しそうになったりしたこともありました。そんなときに支えてくれたり、相談に乗ってくれたりしたのが仲間です。みなさんもこの機会を大切にして同期でつながっていきましょう。私たちファシリテーターも含め、何かあったら相談し合える関係性にあってほしいなと思っています。

グループ2・ファシリテーター 大穂その井さん (OCT6期)

私もがんの勉強会に出て勉強しているつもりですが、きょうは知らない話をたくさん聞くことができました。私は乳がんを経験しており、上半身の話はわかっていたのですが、オストメイトやセクシャリティ、妊孕性といった下半身に関わる問題はあまり理解できていませんでしたし、精神疾患とがんの問題についても考えさせられました。みなさんから話を聞いたことが自分自身への問題提起になり、自分には何ができるのか一日考えさせられたように思います。これからみなさん活動を続けていかれると思いますが、楽しみにしているので、SNS等で繋がってぜひ私にも情報を伝えてください。

グループ1・ファシリテーター 國村三樹さん

10数年前に父が胆嚢がんになり、家族で真っ暗になった経験をしました。そうした状況を変えたいと考えて仕事を探していた時にOCTの立ち上げに関わることになりました。当時はまだこうした活動への理解は得にくく、途方にくれたのを覚えています。そのOCTが今もこのように続いています。社会からも「がんだから触れないでおこう」という雰囲気はなくなってきました。それは、自分のがん経験をカミングアウトして活動しているみなさんのような方がいるからだだと思います。これからもがん患者さんを取り巻く社会が良くなるようによろしく願いいたします。



講師 久田 邦博さん (OCT1期)

どなたの発表も素晴らしく、僕の心に浮かんだ言葉は「やっぱり俺すごいなあ」と(笑)。僕は10年ほど前に参加し、その時の仲間ががん患者支援の分野でよきよき活躍していきました。みなさんもここで何かをつかんで活動し続ければ、そんなに長い時間にもかかわらず社会的に貢献できる活動ができていくと思います。ここでもそうですが、人はつながることでそれぞれの素晴らしさが引き出されて、また違う力に繋がっていくのだと思うので、ぜひどんどんつながってほしい。そのつながりの場所として僕は毎週木曜にオンラインサロン「がんサポ喫茶止まり木」を開いています。こちらにもぜひ遊びに来てください。

オブザーバー 月村寛之さん 「LAVENDER RING」プロジェクト主宰

2017年に部下ががんになったことが契機となり、がんの患者やサバイバーの方にメイクをして写真を撮る「LAVENDER RING」の活動を始めました。がんになっていろいろなことを諦めている人がいて、そこを変えていきたい、がんのイメージを変えたいと活動を始めました。でも、みんなを勇気づけようと思っていたのが、勇気づけられているのは自分たちだと分かってきました。スピーチの投票もありましたが、みなさんはここに来た時点で既に何かを得ているし、そこを大事にしてほしい。そして、なぜ自分がそれをやっているかを自問していれば、何年間経ってまた会ったときに得られるものがあると思います。



オブザーバー 橋本佐与子さん MBS毎日放送 報道情報局・番組センター



OCTには、國村さんがプロジェクトを立ち上げる段階からずっと関わってきました。コロナがあり、去年は仕事の都合でどうしても参加できず、今日は4年ぶりの対面参加となりました。みなさんのプレゼンを聞き、自分のなかで止まっていたがんを報道したいという思いが、またもくもく高まってきました。一昨年ここを卒業された方をインタビューさせていただいたりしていますし、インプットとアウトプットが大事なので、ぜひまたお話を伺わせていただけたらと思います。また、私も続けていくことの大切さを痛感しています。みなさんも続けることを頑張っていっていただきたいと思います。

NPOキャンサーネットジャパン常務理事 古賀真美より閉会の挨拶



みなさんお疲れ様です。私はOCTの立ち上げの頃CNJに入職しました。弟が白血病で私がドナーになった経験から、長年、患者家族として患者支援に関わってきましたが、私自身も今年3月に乳がんになり、手術と放射線治療を終えて、これからホルモン剤を5年飲みましようというところで、立場が変わると思いや視点も変わるのだと実感しています。みなさんもこれから年齢を重ね、いろいろなことで立場が変わるなかで、がんというテーマに対しても見方が変わってくるのではないかと思いながらお話を聞かせていただきました。今日は多くのファシリテーターのみなさん、ボランティアのみなさんがこの会を支えてくださいました。どうもありがとうございます。無事に終了できてうれしいです。来年も継続していくので、今後は皆さんに応援団として支えていただきたいと思います。

8. 投票結果発表

全員の発表が終わった後に、参加者やスタッフ、オブザーバーなど会場にいる全員が「一番心を動かされた発表」を選んで投票。総括の最後に結果発表がありました。第1位に選ばれたのは、20代でがん治療の後遺症として性機能障害を抱えることになった体験を踏まえ、医療者間の連携や患者相談体制の必要性について訴えた柿本聡さんのスピーチでした。



【柿本さんのスピーチ（要旨）】

「医療者間の連携と、患者相談の体制づくりを」（医療者に向けて）

15年前に直腸肛門がんを原発とするステージ4の末期がんと診断されました。外科的手術を受け、同時に人口肛門をつくりオストメイトとなりました。その私が誰にも言えず悩み苦しんできたのはセクシャリティの問題です。

手術の2日前に性機能障害になるという事実を知らされ、翌日に精子保存を行いました。心の準備もできず手術もやめたいぐらいでしたが、誰にも相談せず、言われるままに手術を受けました。治療後に泌尿器科に相談し、病院も回りましたが、「リンパ節ごと神経を切っているから仕方がない」「EDの薬を飲んででもだめならあきらめてください」とのことで、「そんなに勃起させたいなら、形成術でその形にしてもらえばいいです」という心ない言葉もありました。後で知ったのですが、婦人科での不妊治療では生殖医療と繋がり、勃起検査等もして、薬が効くかどうか確認できるそうです。でも私は独身で彼女もいなかったことから、生殖医療にはたどりつけませんでした。男性としての性機能を失い、女性との肌と肌とのスキンシップの機会もつくれなくなり、私はあの苦しく辛かった手術を後悔しています。

手術2日前ではなくもっと前に話してもらえていたら、温存のことについても相談ができ、納得ができたのではないのでしょうか。泌尿器科と生殖医療との協力体制ができていれば検査や相談ができ、一人で苦しむこともなかったように思います。命が助けられればいいのではない。その人らしく生きていくにはどうしたらいいのか。一緒に考え相談できる体制づくりがあれば私と同じように性に対する苦しむ方が減ると思います。医療者の連携と患者相談の体制づくりを切にお願いいたします。





事前学習（インプットセッション）について

今回のOCTでは、セミナー参加前にインプットセッションとして6つのオンデマンド講義を受けていただきました。各レクチャーの内容の一部を紹介しておきます。

「Over Cancer Together (OCT) ～がんを共にのりこえよう～って何？」 國村三樹さん（元CNJ職員）

OCT立ち上げメンバーの園村さんからはプロジェクト概要の説明がありました。OCTは、リブストロング財団とアメリカがん協会が行うがんサバイバーの草の根運動を支援する世界的な活動として始まったものです。日本版キャンペーンの立ち上げには様々な立場の人が参加し、がんサバイバーが自身の体験を発信する活動に関わることで、がんサバイバーが直面している課題を多くの人に伝え、社会全体で取り組むことなどが決められました。「Over Cancer Together」というネーミングには、がんを終わらせる、がんを乗り越えるという意味があり、ロゴの「OCT（オクト）くん」には「特定のがん種に限らない多くの人々が参加・支援するキャンペーンであること」を意味しているとの説明もありました。

「医療者からサバイバーに期待すること～あなたらしく」 山内英子さん ハワイ大学がんセンター

医師の山内さんは、「がん患者らしく」ではなく「あなたらしく」生きることの大切さを話してくださいました。13年勤務された聖路加国際病院で出会った乳がん患者や家族の話も例に挙げながら、「寄り添う」「育てる」「感謝する」の3つキーワードが大切だと説明。医療者からサバイバーに期待することとしては、「自分がこうだったから、こうしたいではなく、外向きのベクトルに変えてほしい」と述べ、その時期については「時を焦らず、その時期をしっかりと考えて」とアドバイスしました。講義の中では、ファッションやカメラなど自分が好きなことを活かし、他のがんサバイバーのために活動をしている乳がんサバイバーも紹介。「あなたらしく、思いを行動に」としたうえで、「変えるべきことを変える勇気の一步を持ってほしい」と背中を押してくださいました。

「国の政策を知り患者ができるロビー活動」 天野慎介さん（一般社団法人全国がん患者団体連合会理事長／一般社団法人グループネクサス・ジャパン理事長）

悪性リンパ腫患者で、厚生労働省のがん対策推進協議会委員も務めた天野慎介さんからは、がん対策の推進に向けて、がん患者が果たす役割についてレクチャーがありました。特に2006年のがん対策基本法成立は、当時末期がん患者だった故山本孝史参議院議員をはじめとした多くがん患者や家族が声をあげたことから実現したものであることを強調。同法施行後も経済的支援や就労支援、へき地医療確保などにおいて、がん患者の声が国や自治体を動かし続けており、最近はクラウドファンディングを活用するなどして、患者と医療者が一緒に研究を進める動きも出てきていることを紹介してくださいました。

「がん患者が発信するうえで気をつけなければならない“がん”のこと」 勝俣範之（日本医科大学武蔵小杉病院 腫瘍内科医）

腫瘍内科医の勝俣さんからは、がん患者が語ることのメリットと、その際に気をつけるべき点について話がありました。がん体験者ならではの体験を発信することには「患者や家族の不安をやわらげ、励まし、知恵、勇気を与えてくれる」というメリットがあるものの、その体験談が誰にでも当てはまるわけではなく、治療の効果を証明する科学的根拠にならないものであることに気をつけるべきだと強調。標準治療がランダム化比較試験などの厳密な臨床試験を経たエビデンスレベル（情報のランク付け）が高いものであるのに対し、体験談は信頼度が最も低いものであると説明がありました。治療効果について言いたいときには、出典（できればエビデンスレベルの高い者）を明らかにするといいとのことでした。

「メディアを有効活用するために」

橋本佐与子さん（MBS毎日放送 報道情報局・番組センター）

テレビ局でがんに関わる問題を報道してきた橋本佐与子さんは、2011年の大学病院の腫瘍内科密着取材を始まりとして、がんとお金の問題、高額新薬、ゲノム医療などを10年以上にわたって取材してきました。最近はや世代のがんをテーマに取り上げているものの、「重いテーマ」として避けられがちなのが難しい点だそうです。橋本さんは、がん患者の「伝えたい」という思いを誠実に受け止めるメディアは必ずいると述べ、メディアに発信する際に気をつけてほしいこととして、「何をいちばん伝えたいかを整理しておく」、「検査の結果や日記、写真などの記録があるなら出したほうがいい」などのアドバイスをしてくださいました。

「プレゼンテーションのまとめ方～伝えるコツと大切なこと」

久田邦博さん（しあわせです感謝グループ代表、プレゼンテーションスキナー）

プレゼンテーション指導のプロである久田さんからは、相手に伝わりやすいプレゼンテーションのまとめ方についてレクチャーしてくださいました。久田さんは、人がプレゼンを聞く際に期待することとして、①真実、②圧倒性がない程度の量、③自分に関係のある内容と論理的な流れ、④適度に簡潔に順序だてて明瞭に話す——の4つがあると説明。そのうえでプレゼンをまとめる際には「ゴールを明確にすること」がもっとも重要であり、それができているかどうか何度も確かめるべきだと強調しました。また、短期記憶の保持という観点から、話す内容は3つに絞るべきであり、しっかり覚えてもらうためにも、大事なことは最初と最後に、また繰り返し伝えることが重要だと強調し、に言うこと、また繰り返して示すことが重要だと強調しました。

REPORT

金子恵妙

（フリーライター：CNJ乳がん体験者コーディネーター、社会福祉士）

セミナーを通して感じたのは、みなさんの「伝えたい」という熱意とやさしさでした。講師やファシリテーターからのアドバイスや、参加者同士のディスカッションを活かして少しでも「伝わる」原稿にしようと真摯に取り組む様子があり、その熱意は他の参加者にも向けられていました。原稿をどう直したらいいか悩む仲間を助け、その「伝えたい」を後押しする。相手の言葉に熱心に耳を傾け、共に笑う。そして、涙を流す仲間寄り添う姿も。今、OCT卒業生がさまざまな場所でがん患者を取り巻く環境を変えようと活動しています。そして、そこに26人の強力な仲間が増えました。みなさんの熱意とやさしさが社会を変えていくのを楽しみにしていますし、私もその活動を積極的に伝えていきたいと思っています。

